

# 宮沢賢治の生涯

(1896—1933) 詩人、童話作家、農芸化学者。農村指導者、宗教思想家。

賢治が生まれる約2ヶ月前の6月15日に「三陸地震津波」が発生して岩手県に多くの災害をもたらしました。

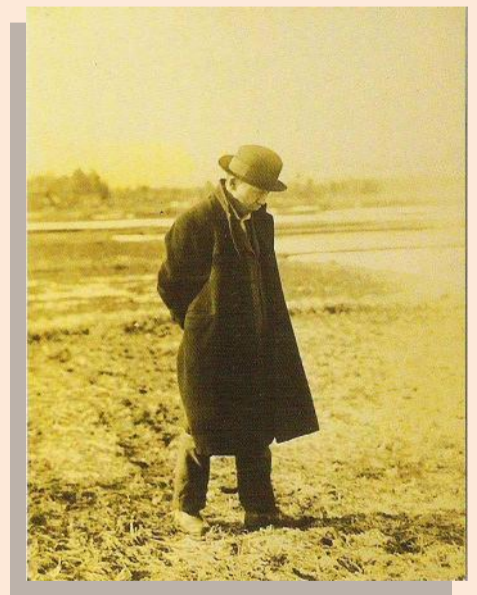
- 1896年（明治29年）8月27日、宮沢賢治は岩手県稗貫（ひえぬき）郡花巻町（現花巻市）に、父政次郎（まさじろう）（質・古着商）、母イチの長男として生まれ、父祖伝来の濃密な仏教信仰のなかで育ちました。誕生から5日目の8月31日には秋田県東部を震源とする「陸羽地震」が発生し、秋田県及び岩手県西和賀郡・稗貫郡でも大きな災害が生じました。この地震の際に母は賢治の入った乳幼児籠を両手でかかえながら上体をおおって念仏を唱えていたと伝えられています。少年時代から植物採集やとくに鉱物採集に熱中、「石コ賢さん」とよばれる。盛岡中学校に入学、2年のころから短歌制作を開始
- 1914年（大正3）盛岡中学を卒業、肥厚性鼻炎手術のため入院。看護婦に恋をするがこの初恋は実ることなく終わる。この秋、島地大等（しまじたいとう）編『漢和対照 妙法蓮華経（みょうほうれんげきょう）』を読んで激しく感動、
- 1918年、得業論文「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」を提出して卒業。
- 1920年、田中智学（たなかちがく）の国柱会（こくちゅうかい）に入会、父にも改宗を迫るが入れられず、
- 1921年 1月に突如無断上京、本郷菊坂町に下宿して筆耕をしながら、布教活動等に加わり、夜は猛然と童話を多作しました。しかし夏、妹病気の報に帰郷、12月から稗貫農学校（のち花巻農学校）教諭となり、以後4年余、教壇に立つ。
- 1924年に詩集『春と修羅（しゆら）』、童話集『注文の多い料理店』を刊行。また、農学校生徒を指揮して自作の劇『飢餓陣営（きがじんえい）』ほかを毎年のように上演した。
- 1926年3月で農学校を退職、下根子桜（しもねこさくら）に独居自炊して開墾、青年たちを集めて羅須地人協会（らすちじんきょうかい）をつくり、農芸化学や農民芸術論を講じたり、レコード鑑賞、合奏練習などの文化活動を開始したりするが、官憲に目をつけられ、賢治自身の病気などのために活動は挫折（ざせつ）。
- 1931年（昭和6）ごろやや病状回復、東北砕石工場技師となって石灰の宣伝販売に奔走するが、無理がたたってふたたび病床の身となる。
- 1933年（昭和8年）9月21日、花巻の宮澤家で結核のため死去。享年37歳。没後1年で早くも三巻本の『宮沢賢治全集』（1934～1935・文圃堂（ぶんぼどう））が刊行され、実弟の清六、詩人の草野心平、高村光太郎らの尽力もあって、宮沢賢治の人と作品は急速に世に知られるようになりました。



- 1933年3月3日に「三陸沖地震」が発生し、大きな災害をもたらしました。誕生の年と最期の年に大きな災害があったことは、天候と気温や災害を憂慮した賢治の生涯と、何らかの暗合を感ずると宮澤清六は指摘しています。地震直後に詩人の大木実へ宛てた見舞いの礼状には、「海岸は実に悲惨です」と津波の被害について書いています。質店の息子であった賢治は、農民がこの地域を繰り返し襲った冷害などによる凶作で、生活が困窮するたびに家財道具などを売って、当座の生活費に当てる姿をたびたび目撃し、賢治の人間形成に大きく影響しました。まさに、宮沢賢治の生涯は「雨にも負けず」の作品に示され、現代の私たちにも、平和な心の大切さを示唆して下さっています。

[宮沢賢治HP執筆者:天沢退二郎氏を参考。]

宮沢賢治 <雨にも負けず >  
雨にも負けず 風にも負けず  
雪にも 夏の暑さにも負けぬ 丈夫なからだをもち  
慾はなく 決して怒らず いつも静かに笑っている  
一日に玄米四合と 味噌と 少しの野菜を食べ  
あらゆることを 自分を勘定に入れずに  
よく見聞きし 分かり そして忘れず  
野原の松の林の陰の 小さな萱(かや)ぶきの小屋にいて  
東に病気の子供あれば 行って看病してやり  
西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を負い  
南に死にそうな人あれば 行ってこわがらなくてもいいといい  
北に喧嘩や 訴訟があれば つまらないからやめろといい  
日照りの時は 涙を流し 寒さの夏は おろおろ歩き  
みんなにテクノボーと呼ばれ 褒められもせず 苦にもされず  
そういうものに わたしは なりたい



生家跡



羅須地人協会に使われた建物（花巻農業高校内）